

文化遺産におけるバリアフリーの基礎的研究

～京都の世界遺産を対象に～

日本大学理工学部社会交通工学科 学生会員 行木 渉 ○徳丸 柊生
 日本大学理工学部交通システム工学科 正会員 江守 央 下川 澄雄

1. 背景

文化遺産はそのものが持つ文化的価値と同時に、地域にとっての観光的価値を有している。これらの価値は同時に重要であるが、筆者らの研究¹⁾では近年の高齢化に伴う風潮の中で文化遺産は、文化的価値(オーセンティシティ)を無視し、観光的価値(アクセスビリティ)のみの向上を進められている場合があると指摘している。これは文化遺産に整備基準が定められていないことに原因がある。よって定量的な整備基準の設定のため文化遺産の現状を把握する必要がある。

2. 研究目的

文化遺産のバリアフリーを考える際にその地が有する地形の厳しさによってアクセス整備の難易度が変化する可能性があるが、この点に着目した研究はない。そこで地形が文化的価値と深いつながりのある京都の世界文化遺産である社寺17ヶ所を対象にアクセスビリティを“車いすでアクセスがどこまで可能か”と定義した調査を行い現状を把握する。本研究では文化遺産の真正らしさを示すオーセンティシティを“文化遺産が有する豊かな地形とそこに構成される施設配置を含む”として定義し、地形を考慮した上でアクセスビリティとオーセンティシティの現状評価を行う。

3. 研究方法

(1) 地形分類

本研究はアクセスビリティの難易度を文化遺産の境内入口から主目的施設(本堂など)の縦断勾配より判断して、大きな縦断勾配を有する文化遺産を山地と分類し、それ以外を平地と分類する。具体的には、歩道で求められる縦断勾配の上限である8%以上を超える文化遺産を歩行者にとって歩行することが容易ではないと考え、山地として分類する。またその他の社寺を平地として分類する。

(2) アクセスビリティ評価

文化遺産の境内のアクセスビリティの現状を把握す

るため、現地調査から境内を車いすで入口から本堂までアクセス可能なのか、境内を自由に回遊することができるのかを評価するため(i)境内出入り口からのアクセスは「都市公園の移動等円滑化整備ガイドライン」、(ii)境内の回遊性は「都市公園の移動等円滑化整備ガイドライン」と「道路の移動等円滑化整備ガイドライン」、(iii)本堂への登壇性は「高齢者、障がい者等の円滑な移動等に配慮した建築設計基準」を参考に作成したアクセス評価項目表-1を設定し文化遺産のアクセスビリティ評価をする。

表-1 アクセスビリティ評価項目

評価	I)境内出入り口からのアクセス 建物と出入り口の基準			II)境内の回遊性 建物の移動等円滑化:歩道等			III)本堂への登壇性 建物の軒先:建物の出入り口		
	①通過に支障となる段がない事。	②幅120cm やむ終えない場合、90cm以上	③出入口から水平距離150cm以上の水平面を確保	①通過に支障となる段がないか。	②すれ違いの必要な幅員200cm以上	③通路の状態	①階段、段が付けられていない事	②建物入口	③声は通しやすい
○(2点)	段無	120cm以上	水平面150cm以上	段無	200cm以上	・平坦 ・滑りにくい ・水はけが良い	段無	90cm以上	・通しやすい ・水平部分あり
△(1点)	段+横斜路	90cm~120cm	水平面150cm以下	段+横斜路	200cm以下	・平坦 ・滑りにくい ・水はけが良い いづれか有	段+横斜路	80cm以上	・通しやすい ・水平部分あり いづれか有
×(0点)	段有	通過できない	水平面なし	段有	すれ違いなし	無	段有	通過できない	無
-(-0点)	運営上不可								

(3) オーセンティシティ評価

オーセンティシティ調査について世界遺産登録の基準を示したベネチア憲章に基づいて表-2に示す評価項目を設定し、文化遺産の境内に増設されているアクセス施設を対象に、その真正らしさについて調査を行う。対象とする施設として、a)本堂のスロープ、昇降機などの段差対応 b)社・寺務所や出札所、c)その他交通施設を対象としいずれかを評価に用いる。

表-2 オーセンティシティ評価項目

評価	スケール	素材	位置	接し方	仮設的建築性	伝統的意匠
○(0点)	建物より補助施設が小さい	同質である	正面から見えない	点的に接している	本格的	伝統的
△(-1点)	建物と同じ大きさ	同質である箇所と異質である箇所がある	正面から一部見える	線的に接している	中間	中間
×(-2点)	建物より大きい	異質である	正面から見える	面的に接している	仮設的	革新的

4. 分析結果

(1) 地形分類

GISにより敷地内経路の勾配を抽出した結果、図-1に示すとおり、縦断勾配8%以上が見られた延暦寺、醍醐寺、清水寺、龍安寺、仁和寺、宇治上神社を山地

として分類し、またその他の文化遺産を平地として分類した。

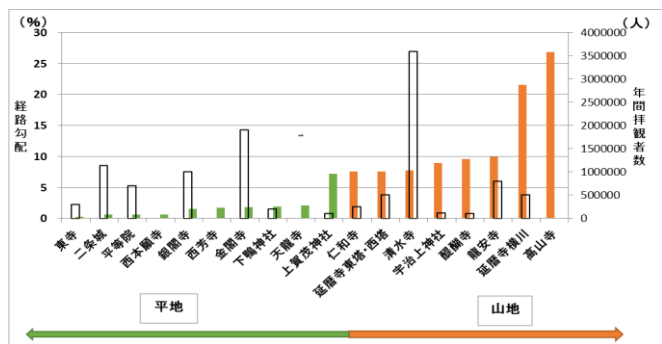


図-1 地形分類と拝観者数

(2) 各文化遺産のアクセシビリティ評価

現地調査の調査内容よりガイドラインに基づいたアクセシビリティ評価の結果を表-3に示す。平地の総合平均点は山地より高いものとなっていた。しかし境内の回遊性の評価は山地の方が高くなっていた。これは、厳しい地形にありながらも優れたアクセス対応の結果といえる。また高山寺は、アクセス整備がなされておらず、入口、境内、本堂までに連続的な段差や、地面の未舗装がほとんどであり、車いすでのアクセスは困難であった。それに対して、二条城は車いす利用者専用の迂回路を増設するなどの配慮でアクセス整備がなされていた。その他にも、平等院は車いすを新しいものに変えておりアクセス対応をより向上させている例もみられた。

(3) 各文化遺産のオーセンティシティ評価

現地調査の調査内容よりガイドラインに基づいたオーセンティシティ評価の結果を表-3に示す。高山寺、宇治上神社、西芳寺には補助的なアクセス施設は見られず、オーセンティシティを低下するような要因は見られなかった。また山地と平地のオーセンティシティの平均点にあまり差異がみられず地形別のアクセス対応にオーセンティシティを下げる要因は少ないという

表-3 オーセンティシティとアクセシビリティの評価結果

地形分類	項目	アクセシビリティ評価												オーセンティシティ評価						総合点			
		(I) 境内出入り口からのアクセス				(II) 境内の回遊性				(III) 本堂への到達性				総合点	評価対象	①スケール	②素材	③位置	④接し方		⑤敷設の適確性	⑥伝統的意匠	
		①	②	③	小計	①	②	③	小計	①	②	③	小計										
山地	延暦寺(東塔)	×	×	×	0	△	△	△	0	×	×	×	0	10	a)	×	×	×	×	×	×	-10	
	延暦寺(西塔)	×	×	×	0	△	△	△	0	×	×	×	0	4		×	×	×	×	×	×	×	-6
	延暦寺(横川)	×	×	×	0	△	△	△	0	×	×	×	0	3		×	×	×	×	×	×	×	-3
	龍安寺	×	×	×	0	△	△	△	0	×	×	×	0	8		×	×	×	×	×	×	×	0
	清水寺	×	×	×	0	△	△	△	0	×	×	×	0	12		b)	○	△	×	△	×	×	-8
	高山寺	×	×	×	0	×	×	×	0	×	×	×	0	4		-	-	-	-	-	-	-	-
	龍安寺	○	○	○	6	×	×	×	0	×	×	×	0	8		b)	○	○	×	×	×	×	-2
	仁和寺	○	○	○	6	△	△	△	0	×	×	×	0	10		a)	○	△	×	×	×	×	-5
	宇治上神社	×	×	×	0	△	△	△	0	×	×	×	0	5		-	-	-	-	-	-	-	-
	山地平均(標準偏差)	3.44(2.98)				3.66(1.07)				7.11(3.03)				1		-	-	-	-	-	-	-	-4.60(3.44)
平地	上賀茂神社	○	○	○	6	○	○	○	0	×	×	×	0	12	b)	○	○	×	×	×	×	-2	
	西本願寺	○	○	○	6	△	△	△	0	△	△	△	0	9	a)	○	×	×	×	○	×	-6	
	平等院	○	○	○	6	×	×	×	0	×	×	×	0	4	b)	○	○	○	×	×	×	0	
	二条城	○	○	○	6	○	○	○	0	△	△	△	0	16	b)	○	○	△	△	△	△	-2	
	東寺	○	○	○	6	△	△	△	0	△	△	△	0	11	b)	△	○	×	×	×	×	-7	
	天龍寺	○	○	○	6	×	×	×	0	×	×	×	0	7	a)	○	○	×	×	×	×	-2	
	金閣寺	○	○	○	6	×	×	×	0	×	×	×	0	9	b)	○	○	×	×	×	×	-4	
	銀閣寺	○	○	○	6	×	×	×	0	×	×	×	0	8	b)	○	○	×	×	×	×	-4	
	下鴨神社	○	○	○	6	○	○	○	0	×	×	×	0	11	b)	○	○	×	×	×	×	-2	
	西芳寺	△	△	△	4	△	△	△	0	×	×	×	0	4	12	-	-	-	-	-	-	-	-
平地平均(標準偏差)	6.70(0.84)				3.77(1.41)				11				11	10.6(2.42)	-	-	-	-	-	-	-	-3.22(2.09)	

結果になった。また評価対象別にみると a) スロープ、昇降機などの段差対応は設置されている社寺ごとに工夫されていて、伝統的意匠に大きくオーセンティシティに重点が置かれたものが確認できた。b) 出札所や社・寺務所は各社寺、本堂やその周囲の建物と同質な素材が使われ大きさも周りの景観から突出しないような配慮がなされていた。c) その他交通施設は延暦寺のロープウェイなどの大型施設が見られたがアクセシビリティの向上に特化しておりオーセンティシティに重点を置いていなかった。

5. まとめ

図-2に各社寺のオーセンティシティとアクセシビリティの関係を示す。これよりアクセシビリティが中央値の8点を超える文化遺産は、図-1に示す通り多く、拝観者を抱える文化遺産が含まれアクセス施設の有効性が確認できた。また双方の評価が高くなった二条城や、双方の評価が低くなった延暦寺では、地形条件による要因によりオーセンティシティとアクセシビリティにトレードオフの関係が伺えた。一方で東寺、西本願寺では、バリアに対してオーセンティシティを損なう過度なアクセス整備がなされていることが伺えた。

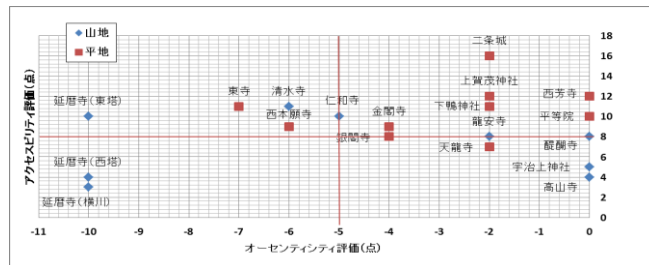


図-2 オーセンティシティとアクセス評価の関係

6. 参考文献

1) 江守央：文化遺産のユニバーサルデザインとオーセンティシティに関する研究—鎌倉に着目して—, 第48回土木計画学研究発表会・概論集 CD-R(141), 2013. 6.

